



東日本大震災で高校生が果たした役割

東日本大震災直後、避難所以外でも高校生が大きな役割を果たしました。

●震災後に高校生が果たした役割を見た人々の声

- 震災当日、膝くらいまで水位がある中、ジャージと靴を履いた高校生が、避難してきた私たちを水につかりながら体育館へ誘導してくれた。帰宅できずその場に居合わせただけの彼らの姿は、本当に寒くて冷たい夜でも安心できる、そして頼もしい存在でした。
- 食事の配布の時、地区別の整列づくりに協力してくれた。
- 炊き出し、お弁当を作って配達、支援物資の配達をしてくれた。自分たちも不自由な生活を送っている時に、他人のことを思う心があって優しい子どもたちと思った。
- 自分自身も被災しているのに、他のお宅へと水を運んだり、お年寄りの方に長時間歩いて食事を届けた。自分だったらその子たちと同じことができるだろうかと考えさせられた。
- ボランティアセンターでのボランティアマッチングを行っていた。身近に起きている震災なのに、一切ボランティアをしない大人も多い中、まだ10代の彼女彼女らは非常に頼もしく、誇りであり、まぶしかった。
- 避難所で被災した子どもたちと遊んでくれた。狭い避難所生活をしてきた子どもたちはとても楽しそうだった。その状況の中、大人たちは子どもと遊んであげる余裕がなかった。中高生たちがとても‘たくましく’見えました。



避難所で小さな子どもに絵本を読んで聞かせる高校生（南三陸町）
（写真提供：河北新報）
（公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン「震災後に中高生が果たした役割の記録プロジェクト報告書」〔2013年4月〕を元に再構成／再編集したもの）

コラム

「セルフディフェンスの精神・自主防災組織」

1995（平成7）年1月に数千人の死者を出した阪神・淡路大震災で、防災のために最も活躍したのは地域住民だったことが判明（救出者の8割は住民自らの活動による）しています。この事例から、自主防災組織がクローズアップされました。なにしろ、世界のたった0.3%しかない日本の国土で、世界で発生する大きな地震（マグニチュード6以上）の20.9%が起きているのですから。

大切なことは、自分や自分の家族は自分で守り、自分の町や自分の隣人たちは自分たちで守るというセルフディフェンスの精神になります。それが「自主防災組織」です。地域や町を守るために自主防災組織に加入するなど、積極的に地域防災に協力しましょう。

2014（平成26）年現在、自主防災組織は全国で156,840組織あり、全自治会に対するカバー率は80.0%（平成27年版防災白書）ほどになっています。

（参考：河田恵昭「大規模災害による人的被害の予測」『自然災害科学』第16巻第1号、『平成27年版防災白書』などを元に作成）



高校生が地域の一員として行っている活動

高校生も現在、地域の一員として、さまざまな活動を行っており、このような取り組みが災害時にも生かされます。普段からどのように地域の人と関わっているか話し合ってみましょう。

●築館高校の生徒による、地域で自分たちの役割を再認識する訓練

築館高校は、一人暮らしの高齢者や要配慮者のいる世帯の安否確認を行う情報収集をはじめとした防災訓練を地元地域と連携して行いました。

東日本大震災の教訓では、災害が起こった直後は混乱し、地域の正確な情報を得ることが課題となりました。

そのため、情報伝達・収集訓練を行う班に75名をあて、地域の避難誘導係の方々と協力し、一人暮らしの高齢者や要配慮者のいる世帯の安否確認と本部からの避難などに関する情報を伝えて回りました。

さらに、一人で避難が困難な高齢者には、車椅子による避難の介助をするなど、地域の方々とともに災害時の避難方法を確認しました。この訓練をとおし、高校生が、災害時に「助ける」立場として貢献できることを再認識しました。

生徒の声

- 我々高校生が地域の方を守る、助けるという存在になるよう訓練しました。
- 今回助ける側に立って、大変さやどうすればいいかを知ることができたので、とてもいい経験ができました。
- 高校生は社会に出る一歩手前なので、しっかりと地域に貢献していけたらと思いました。

地域の方の声

- 高校生は、力があってとても助かります。



●西山学院高校の生徒による、地域の高齢者宅の雪かき

西山学院高校は、七ヶ宿町に学校があり、生徒は、町内で寮生活をしています。七ヶ宿町は、県内でも有数の雪の多い地域で、毎年雪かきには苦労しています。

そこで、生徒たちは、地域の一員として、高齢者宅の屋根から落ちた雪の雪かきを行っています。

